

# 個別ゼミ概要 (WEB掲示用)

作成日：2023年 4月 10日

授業科目名	如水会寄附講義「如水ゼミ」		
ゼミ名	マスコミ (新聞・出版)		
講師幹事名	永井 利治	大学教員	全学共通教育センター長 南 裕子
学 期	2023年(春夏)・秋冬	開講時間	水曜 4～5時限

## 【授業の目的・到達目標】

- ・ ネットニュースや SNS で最新の情報が瞬時に世界中に伝わる現在、社会におけるプリントメディアの意義とは？ 経験に裏打ちされた卒業生の講義を基に一緒に議論していきましょう。社内訪問や取材現場の見学も行います。抽象的な内容ではなく、具体的な話を中心に4時限目で講義を行い、5時限目はディスカッション形式で進めていきます。積極的な発言を望みます。

## 【上記目的・目標達成方法】

## 【授業の内容と計画】

月日	講師名	卒年 学部	社名・役職 (※役職は作成日現在)	講義内容
4月19日	永井 利治	昭61社	共同通信社 論説委員長	1, オリエンテーション 2, 記者は何を追っているのか 3, 記録と記憶 4, 事実を解き明かす 5, 人と向き合う面白さやつらさ 6, メディアはどう見られているか
4月26日	石橋 大祐	平11社	読売新聞 教育ネットワーク事務局	1. 概論 新聞ができるまで 2. 伝える、伝わるあなたのニュース SNS時代のニュース価値判断とは キャリア形成に活かす情報活用術 新聞で本当に就勝できてしまった件 3. 新聞社×SDGs×教育 ～じぶんごとから はじめよう～
5月31日	大場 あい	平9社	毎日新聞社 科学環境部 副部長	1. メディアが伝える科学、環境問題 2. 科学記事はどうやって作られるか 3. 記者の一日、デスクの一日 4. 地方機関勤務の面白さ 5. 一般紙が環境、科学を報じる意義
6月7日 @ 時事通信社 本社	織田 晋太郎	平18社	時事通信経済部 編集委員	2017年から21年にかけてトランプ政権下の米シリコンバレーに駐在し、IT 企業を取材した経験から SNS 汚染と新しいメディアの潮流を紹介する。時事通信本社を見学し、デジタル報道の行方についても考える。 一、ロシアによる介入と SNS 汚染 一、トランプ劇場とオンライン過激主義の台頭 一、新しいメディアの潮流 一、デジタル報道の行方
6月21日	石鍋 仁美	昭62社	日本経済新聞社 編集局 編集委員兼論説委員	1. 経済記事はなぜわかりにくいのか 2. ネットニュースとマスメディア 3. 「炎上」現象と報道の関係
7月5日 @講談社 本社	米沢	平17社 平19社院	講談社 週刊現代編集部 副編集長	・なぜ編集者は「一流シェフ」であるのか？ 狩猟採集から味付けまで ・なぜ記者と編集者はこんなに違うのか？ 週刊現代のヒット企画、現代ビジネスのPVの稼ぎ方から、『未来の年表』シリーズが売り上げ100万部超となった秘密まで ・実践編：話題となる雑誌企画、大ヒット本企画を練ろう ——雑誌はタイトルが9割。本の表紙は顔面、ストー

## 個別ゼミ概要 (WEB掲示用)

				リーは身体である ・「確信犯」「敷居が高い」「なしくずし」の意味は？——出版社の良心「校閲」の現場から
--	--	--	--	--

### 【学生へのメッセージ】

ネットだけでなく紙の新聞や雑誌にもよく目を通しておいてほしい。

【参考文献】 7月 6日 米沢 講師 『未来の年表』シリーズ（講談社現代新書）、あるいは雑誌「週刊現代」を読んでおいてください。

### 【受講生に対するメッセージ、希望】

将来、メディアの世界で働きたいと思っている学生、メディアをよく知り活用したいと思っている学生を歓迎します。

### 【過去の受講生の声】

#### 社会学部 4年

「現役新聞記者や編集者の方とのインタラクションを経て、マスメディアという特殊な産業について二点意識するようになりました。第一に公器としてのジャーナリズム。社会問題をフレーミングし世に知らしめる記者職の影響力が伝わりました。第二に娯楽としてのジャーナリズム。新鮮だったのは石橋さんの「毎日楽しみにして新聞を読んでいる田舎のおばあちゃん」の話や米沢さんの「面白くてためになる新書」の話です。講師の方々には、プロとして常に情報の正確さや公共性を探究しながらも、読者や視聴者の素朴な視点も持っているのだと感じました。」

#### 社会学部 3年

「ジャーナリストとして第一線で活躍してきたOB・OGの方から直接お話を聞き、記者の働き方や使命、やりがい、大変さなどを知ることができるゼミでした。私自身は、将来の選択肢の1つとしてジャーナリストを考えていたため、リアルな働き方を学んだことで、今後の進路選択の一助になったと感じています。非常に充実した有意義な3か月間の講義でした。」